

資料4 療養支援モデル											
*使用方法:自立度確認シートでチェックがつかなかった項目があった場合は、印の介入例を参照して介入実践する。(介入例は、幼児前期1.2.3.4、幼児後期1.2.3、学童前期1.2.3.4.5、学童後期1.2.3.4.5.6、思春期1.2.3.4.5がある。)											
	発達の特徴と課題*	A.医療従事者とのコミュニケーション	B.疾病の理解		C.自己管理(セルフケア)の促進		D.自己決定能力の育成		E.児童の社会参加と関連機関との連携		
			児童	保護者	児童	保護者	児童	保護者	児童	保護者	
乳児期・幼児前期	<ul style="list-style-type: none"> 基本的生活習慣の獲得を促す 自分の感情や意思を表現する 道徳性や社会性の基盤が育まれる 	A-1医療従事者と挨拶ができる(幼児前期2、幼児後期3)	B-p1疾病の病態、治療、およびその見通しを理解している(幼児前期1・2、幼児後期2・3、思春期1) B-p2児童が慢性疾病にかかったことに対する思いを医療従事者に話している(幼児前期1・2、学童後期3、思春期1) B-p3成長の段階に合わせて児童自身が疾病について理解することの必要性を理解している(幼児前期1、幼児後期3)	C-c1年齢や病状に見合った生活に必要な活動を自分で行うことができる(幼児前期4)	C-p1児童に必要な療養上の世話を組み込みながら、基本的生活習慣が獲得できるように支援している(幼児後期2)	D-c1症状に応じた対処や検査・処置・治療を嫌だと思っても受けることができる(幼児後期3)	D-p1医療従事者の説明を児童にわかるように説明して検査や処置を促している D-p2児童が検査や処置を頑張っ受けたことを褒めている(幼児後期3、思春期1・2) D-p3成長の段階に合わせて、児童が療養生活の中で自己決定できることの必要性を理解している(思春期1)	E-c1家族以外の人と関わりをもつことができる(幼児後期2、学童前期1)	E-p1地域における相談支援事業、医療費助成制度、福祉サービス、患者会・家族会等を必要に応じて活用している(幼児前期1・2、学童後期4)	E-p2幼稚園・保育所・認定こども園に関する情報を得て、必要に応じて入園準備をしている(幼児前期4、幼児後期2)	E-p3集団生活上、必要なこと(療養行動や医療的ケア、注意事項)を関係者に伝えている
幼児後期	<ul style="list-style-type: none"> 集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基盤の形成 自然や美しいものに感動する心などの育成 	A-2医療従事者が患者に語る言葉や話を、関心をもって注意して聞くことができる(幼児前期2)	B-c2生活の中で自分に必要な療養行動や医療的ケアを知っている(幼児後期1)	B-p5生活の中での注意事項について、児童にわかりやすく話している(幼児後期3、学童前期5)	C-c3病状と年齢に見合った基本的生活習慣が獲得できている	C-p4児童のやりたい気持ちを支援している(幼児前期4、幼児後期2、学童後期4、思春期1)	D-c2いくつかの選択肢の中から方法を選ぶことができる(幼児後期3)	D-p5児童の選択を尊重している(思春期1)	E-c3集団生活の場で自分の体の不調を訴えることができる(学童前期1・5、学童後期2)	E-p5学校の生活の場で必要な療養行動を適切に行うことができるように学校関係者と調整している(幼児後期3)	
											B-c3自分の体のどの部分に疾病があるか知っている(幼児後期1、学童前期2・3・5、学童後期1・2)
学童前期	<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感の育成 自他の尊重の意識 主体的な責任意識の育成 体験活動の実施など実社会への興味・関心をもつきっかけづくり 	A-3感じたこと、考えたこと、したいこと、してほしいことなどを医療従事者に話すことができる(学童前期1・2、学童前期4、学童後期2・4・5・6)	B-c4疾病によって、どのような症状があるか知っている(幼児後期1、学童前期2・5、学童後期1・2・4、思春期1)	B-p7児童が疾病について理解することを促している(学童前期5、学童後期1)	C-c5病状と年齢に見合った規則正しい生活習慣が獲得できている	C-p7児童ができる療養行動が増えていることを認め、児童に伝えている(幼児後期1、学童後期2・3・4・6、思春期1)	D-c4いくつかの選択肢を自分で考えることができる	D-p7児童の意思決定プロセスを支えている	E-c5遠足等の体験活動に参加できる(思春期1)	E-p7遠足等の体験活動に参加するための調整をしている(学童後期2)	
											B-c5人の体のつくりと働き、疾病の状態について知っている(学童前期2、学童後期1・2、思春期1)
学童後期	<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感の育成 自他の尊重の意識 主体的な責任意識の育成 体験活動の実施など実社会への興味・関心をもつきっかけづくり 	A-4疾病について医療従事者と話し合うことができる(思春期1)	B-c6疾病について理解し、必要な療養行動について知っている(学童前期2、学童後期1・2・5、思春期1)	B-p9疾病の進行の防止に必要な生活様式を知っていて、必要に応じて助言している	C-c7適切な療養生活を継続できる(学童後期5、思春期1)	C-p9児童ができる療養行動を見守り支援している(学童後期4・5、思春期1)	D-c6適切な療養生活について自分の意思で決められることができる(思春期1)	D-p9児童の意思決定プロセスを支えている	E-c7集団宿泊の行事等に参加できる	E-p9中学校に関する情報を得て入学準備をしている	
											B-c7疾病について理解した上で、適切な療養生活について知っている(思春期1)
思春期	<ul style="list-style-type: none"> 人間としての生き方を踏まえ、自らの個性や適性を探究する経験を通して、自己を見つめ、自らの課題と正面から向き合い、自己あり方を思考 社会の一員として他者と協力し、自律した生活を営む力の育成 	A-5学校生活、療養生活、将来への夢などについて医療従事者と話し合うことができる	B-c9自分の疾病について親しい友人に話すことができる	B-p10児童が体調や症状を自ら把握し、適切な療養生活を継続的に実行しているか見守り、必要に応じて助言している	C-c9自分ら生活の場での必要事項について、児童にわかりやすく話している(幼児後期3、学童前期5、学童後期4、思春期1)	D-c7適切な療養生活について自分の意思で決められることができる(思春期1)	D-p10児童の意思決定プロセスを支えている	E-c9自分の疾病について親しい友人に話すことができる	E-p11高等学校に関する情報を得て、入学準備をしている(思春期1)	E-p12児童と一緒に将来のことについて考えている(思春期1)	
											B-c9自分の疾病について親しい友人に話すことができる

*子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題(文科省:子どもの徳育の充実に向けた在り方について(報告)より)
 注:介入例については療養支援ガイドに掲載されている。